

未来眼やまがた 第13回

地域の日線で地域を伝える

新しい年がスタートした。山形県のマスコミ界を担う山形新聞の歴史、地域貢献活動、情報化における山形新聞の役割、さらに今年注目すべきニュースについて、山形新聞会長相馬健一氏にうかがった。

■ 山形とともに歩み131年

町田 私は山形にお世話になって今年で満14年になります。秋田出身で、東北のことはだいたい分かっているつもりでしたが、東北6県ともそれぞれ地域の特性があります。相馬会長にはこれまで山形のことについていろんなことを教えていただき、感謝しております。本日は山形新聞について、ぜひおうかがいしたいと思っています。

相馬 山形県は明治9年(1876年)、山形・米沢・鶴岡の3県が合併して誕生し、初

代県令三島通庸が着任しました。その年の9月に「山形新聞」が創刊されました。

町田 現在の山形県の誕生とともに、山形新聞が創刊されたわけですね。

相馬 はじめは自由民権思想の台頭を背景に、政治結社の機関紙のような新聞でした。「山形新聞」という名前でしたが、それを発行する会社は「山形自由新聞社」だったのです。政党機関紙の時代は長く続きました。

そして1923年、昭和3年になって早稲田を卒業し、朝日新聞の記者だった服部敬雄氏が山形に戻り経営に携わるようになり、政党機関紙からの離脱を宣言し、言論機関としての立場を明確に確立したのです。つまり今のような普通の新聞になったわけです。

その後、戦争が拡大し戦時色が強まり「自由とはけしからん」と軍部から抗議があり、自由は消えてしまったのです。

町田 お話をうかがっていると、まさに時代とともに歩んできたという感じがします。

相馬 日本の新聞界は欧米と違って地方紙と全国紙が共生する、いわば二重構造です。国土が狭い上、鉄道や道路網が発達したからでしょう。

私が入社した1953年、昭和28年は、県内初の民間放送局として山形放送が誕生したときです。当初はラジオ局でスタートし、7年後の昭和35年にテレビ放送を開始しました。山形放送は山形新聞を母体に、県内の経済界をはじめ県内各層の協力・支援を得て作られたもので、以来山形新聞と一体となって山新グループの中核として、地域発展のために力を尽くしてきました。

山形新聞と山形放送は同じ社屋にいてすべての面で一体化しておりますが、新聞と放送の共生は全国でも珍しく、最近の地方テレビ局は中央のキー局の資本や経営の参入が目立っています。

町田 相馬会長は入社以来、社会部記者としてご活躍されたとうかがっております。

相馬 現場の記者は約30年、その後論説委員長、編集局長を務めここ25年ほどは経営に携わっています。

山形新聞の経営理念は4つです。まず報道機関として当然ですが「社会正義の実現」それから「県勢の発



●相馬 健一 (そうま・けんいち)

1931年山形県生まれ。山形大学文理学部卒業後、山形新聞入社。取締役論説委員長、常務取締役編集局長などを経て、93年代表取締役社長、2005年より現職。日赤紺綬有功会会長、社団法人山形県経営者協会会長、財団法人山形美術館理事長など兼務。

展と地域社会の向上」、「言論即実践」、「利益の地域還元」です。「言論即実践」とは、紙面で提唱したり、主張したことは、実現に努めなければならないという意味です。

■ 地域の文化の発展を担う

相馬 それから山形新聞社では、地域へ利益を還元するために、さまざまな地域貢献事業を行っています。このような事業は、今後増えることがあっても減ることはありません。

地域貢献事業では、まず「最上川さくら回廊」として最上川に毎年桜を植えて、美しい郷土づくりに取り組んでいます。それから、警察官を顕彰する「県民の警察官」や、結婚式を迎えられたご夫婦におしどりのレリーフを贈る「おしどり金婚さん」、また「愛の事業団」、「21世紀県民会議」、「県勢懇話会」などがあります。

このような、幅広い分野に取り組むことで、読者の皆様から信頼を得て、今日の地位を築くことができたのだと思います。

町田 最上川さくら回廊の取り組みは素晴らしいですね。最上川兩岸に桜を植えて景観を美しくするだけでなく、自分の植えた桜が成長し、やがて花を咲かせるのはとても楽しみです。

相馬 桜には名札がついていて、孫が生まれたとか、家を建てたとか、家族の記念として植樹されることが多いようです。今は最上川の兩岸だけでなく、範囲を広くして植樹活動が行われています。

以前は最上川を管理する国からは、「河川の土手に植林してはダメだ」と言われていましたが、方針が変わり今では周辺の市町村や企業も協力し、県民運動につながっています。この最上川さくら回廊の取り組みは「100年事業だ」と思っています。

町田 山形美術館も、地方にある美術館の中では大変出色な美術館ではないでしょうか。素晴らしい作品がたくさんございますね。

相馬 山形美術館は昭和39年に山形新聞が提唱し、県や市、また県内企業の協賛寄附を受けて開館しました。お陰様で県出身の作家の制作発表の場や、国内外のすぐれた美術展の開催を通じて、県民の皆さんの芸術や文化活動のために貢献させていただいております。

話は変わりますが、冒頭、頭取から「地域特性」の話がありましたが、東北だけでなく、山形県内でも村山・庄内・置賜・最上にそれぞれの特性や歴史があります。

最上家はお家騒動で滋賀の天津に移されたため、山形には藩学など学問的伝統は残っていません。しかし、



●町田 睿 (まちだ・さとる)

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、94年株式会社荘内銀行取締役副頭取就任、95年より現職。

最上義光が築いた町づくりに、職人町として産業の集積は残されています。こうした最上家の功績を後世に伝えるため、霞城公園の近くに最上義光歴史記念館をつくったのです。

■ 継続してこそ、地域に役立つ

町田 また、山形交響楽団は全国的にも高く評価されています。現在の指揮者である、飯森さんの取り組みの成果と同時に、初代指揮者の村川千秋さんのご努力が下地になっているのでしょう。

相馬 村川さんは苦勞して山形交響楽団を築いてこられました。財政が厳しく、練習場が無いなど多くの障害のなかでも、楽団員の方々は素晴らしい演奏をしてくれています。

町田 お話をうかがっていると、山形新聞社が中心になって、地域文化のために取り組まれてきた多くの財産が残っているような感じがします。

相馬 このような地域貢献の活動は、われわれの努めとして、継続してやっていかななくてはいけないと思っています。

町田 ところで、日本は国の財政が危機に瀕し、国・地方合わせて800兆円の債務を背負っております。今後、国からの地方交付税や補助金に頼ることはできなくなり、地域がそれぞれの特性を生かして自立することが要請されています。

その意味でも、われわれ山形県民自身がどのような地域資源を持っていて、それをどう活かしていくのが大きな課題になります。そのためには、山形新聞をはじめとした地方のマスコミの力が大きいと思います。

相馬 たしかにその責任はあると思います。地域が自

立するためには、インフラの整備はどうしても必要です。そのための気運や方法論を盛り上げることが大事です。

また、どんなに国や県の財政が厳しくとも、民間の力で継続してできる方法でやっていかなければならないこともあると思います。

■ 新聞から、総合情報産業へ

町田 情報通信技術の革新が急速に進んでいます。新聞、ラジオ、テレビ、そして今やインターネットなど多くのメディアが登場し、情報を伝える媒体が変わりつつあります。現在のようなメディアの多様化をどのようにご覧になっておられますか。

相馬 情報化が進み、メディアが多様になると、情報が氾濫します。そのため、何が正しい情報なのかが分からなくなります。

新聞はこれまで1世紀以上も発刊されてきました。新聞の情報収集力、情報に対する価値判断力、加工技術などは、他のどんなメディアにも負けないと思っています。だからこそ、生半可ではなく、新聞はさらに新聞の強みを生かした情報発信をしていかななくてはなりません。

町田 創刊130年を記念して、昨年「山形メディアタワー」が完成しましたね。このメディアタワーも、これからの情報化への変化を展望されたのでしょうか。

相馬 新しいメディアの特徴は、「双方向が主流であ



2007年に完成した「山形メディアタワー」

る」ということです。ですからこれからは新聞もITを駆使していろんなものを取り込み、総合情報産業を目指していくべきだと思います。「山形メディアタワー」という名称もそのような意味を込めて名付けました。

町田 私も見学させていただきましたが、素晴らしレベルですね。

■ 課題は人材育成

相馬 情報化への対応も重要な課題ですが、一番力を入れなければならないのは人材育成です。新聞記者は、一朝一夕には育ちません。

今の若い人は、人と接する機会、特に世代が違って人と接する機会が少ないようです。それをきちんと鍛えていくことが一番難しい課題です。

町田 確かにそうですね。私も若い人に対して「君たちは同世代の人との付き合いは上手だけど、世代を超えた人たちとの付き合いも大事だよ」と言っています。

相馬 新聞の見出しの作成や紙面のレイアウトなどは、コンピューターで簡単にできるようになりました。しかし、取材力、判断力を兼ね備えた記者を養成していくことは容易にできません。それから、新聞記者は取材に関する知識も重要です。この人材育成がうまくいくかどうか大きな課題です。

町田 新聞記者はいろいろな方々に、直接インタビューする機会が多いですから、勉強される機会が多い、つまり成長するチャンスが非常に多いのではないかと思います。

相馬 だからこそ、新聞記者は普通会えない人にも会うことができるという機会を生かして、その分いろいろ勉強し、いかに幅広い知識を自分のものにできるかが大切です。

町田 新聞は紙面づくりに特徴が表れると思いますが、記事の採り上げ方には基本的な山形新聞としてのポリシーみたいなものが強く現れるのではないのでしょうか。

相馬 先ず、当たり前のことですが、ジャーナリストとして公平・公正・中立であることが大事です。新聞は、日々の様々な出来事にかかわっています。そして、このような時代ですから、新聞社や社員に対する目も非常に厳しくなっています。個人的にどうであれ、少なくとも紙面に表すには、公平・公正・中立の立場でなくてはなりません。

町田 一つひとつの事象をどのように取り上げるのか、大きくするのか小さくするのか、あるいはどういう側面からこれを見るのかで新聞社の特徴が出るとは思います。いかがですか。

相馬 ニュースはその日によって違います。ただ最近はどうも「横ならび・右ならえ」が多いと思います。



桜の植樹で美しいふるさとをめざす「最上川さくら回廊」

何かと言うと、みんな一斉に行って取材し、すぐ忘れて、また別の方へ行く。こういうのは新聞の力を弱めるのではないかと心配しています。朝のテレビを見て、新聞を見ますと、ほとんど同じですね。違うのは土曜と日曜ぐらいです。土曜と日曜は比較的ニュースが少なく、だからこそ独自のネタが出てきます。

山形新聞の場合は、地域の目線でものごとを捉えることが中心です。そして、地域の小さなことまできちんとフォローすることを大事にしています。

町田 記者クラブでは、材料をちゃんと用意してくれています。ところが、自分の足で、あるいは自分の問題意識で取材する場合、やはり地方新聞の記者の方が鍛えられており、自分の問題意識で取材できるのではないのでしょうか。

相馬 結局、何でもやらなきゃならないのが地方紙の特徴で、そのなかで新聞記者は鍛えられます。

町田 企業や社会に対しても、新聞は大きなチェック機能を果たしていますし、そのような役割は非常に大きいと思います。

相馬 それだけに、新聞社や新聞記者は注意しなければいけません。つまり、報道するわれわれ自身が人間的にもしっかりし、きちんとしたお付き合いができる人材の育成が必要です。

町田 そうですね。これからの地方紙はそれぞれの個性・特徴を持ち、社風を反映させていくことが非常に大事だと思います。

相馬 社風をきちんと末端まで浸透させるのが、なかなか難しくなってきました。われわれの記者時代には、社内は騒々しく、うるさいくらいでしたが、今の人は意外と仕事しながら喋ったりしませんね。ですから新しく「山形メディアタワー」をつくった時も、風通しの良い職場を目指し一番上の景色の良いところを社員

食堂にしました。

■ 今年、注目されるニュース

町田 今年もスタートしたばかりですが、注目されているのはどのような出来事ですか。

相馬 やはり選挙でしょう。総選挙によってどのような政権が生まれ、どのように国の骨格づくりが進んでいくのに関心があります。

このような時代のなかで、みんなが希望の持てる国となるようなリーダーシップのある政治家が求められています。

町田 今年予想される衆議院選挙が一番大きなことかもしれませんね。

昨年7月末の参議院選挙では、それまで自民党の基盤だと思っていた東北や四国が、引っくり返ってしまったのは、自民党に対する大きなインパクトだったと思います。

相馬 そうですね。それまでの内閣が大都会を重視した形になっていますから、選挙の結果に急激な変化が起こったのだと思います。

ガソリン税の一般財源化の問題にしても、大都市中心の発想ですから、このような問題にどう取り組んでいくのか。それから何でも「市場化」や「グローバル化」が求められるのではなく、地方の視点でどのように考えていくかをしっかり見極めないといけないでしょう。

町田 お話をうかがって、地方紙の存在理由が改めてクローズアップされる時代ではないかと思っています。

同じように、われわれも地方銀行の存在理由を改めて認識しなくてははいけません。そうでなければ、単に効率化だけを求めて「市場原理万能主義」だけが優先されてしまいます。

相馬 地方には人は住んでいるし、地方の生活があるわけです。それを無視してはなりません。しかし、どのような形が理想的かといえば、いわゆる選挙向けの施策ではなく、地方への愛情が大事だと思います。それが欠けてきているのではないのでしょうか。

それは政治の問題だけではなくて、社会全般に他人に対する思いとか、愛情が根底に無いから、世の中が乱れてきているということ、きちんと認識しなければなりません。

町田 その通りですね。本日は貴重なお話をありがとうございました。